3月13日のメッセージ

聖書:マルコによる福音書 3: 20-27

「内輪で争えば」

イエスは荒野での誘惑に打ち克たれました。インスタントな願いを叶えることを「できるけれど、やらない」と選択されたイエスでしたが、その持っている力、イエスご自身から染み出る力は周囲の人々を癒していきます。その例は枚挙に暇がありません。汚れた霊を追い出し(「イエスが、『黙れ。この人から出て行け』とお叱りになると……」マルコによる福音書 1:25-26)、病人を癒されました(「イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし……」マルコによる福音書 1:34)。重い皮膚病の人を癒やし(「『よろしい。清くなれ』と言われると、……その人は清くなった。」マルコによる福音書 1:41-42)、中風の人を癒されもしました(「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」マルコによる福音書 2:11-12)。いずれも、直接的に願いに応えるというよりはむしろ、その人と神との関係を修復させるため、真の救いの道を歩ませるために起こった奇跡でした。

しかし、人々はそのイエスの深い思いに気づくことはありません。もっと願いを聞いてほしいと集まってきます。「あの人の願いが叶ったのならば、私のもぜひ」と(「群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。」マルコによる福音書 3:20)。イエスの身内の者さえ、事態を正しく認識しようとはせず、混乱の原因を作り出した元凶と非難します(「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た……」マルコによる福音書 3:21)。神の力を信じようともしません。

もっと神に近い立場であるはずの律法学者たちでさえ、イエスの力を、イエスの働きを信じません。 あろうことか、悪霊の力で行っているとさえ言う始末です(「エルサレムから下って来た律法学者たち も、『あの男はベルゼブルに取りつかれている』と言い、また、『悪霊の頭の力で悪霊を追い出してい る』と言っていた。」マルコによる福音書 3:22)。良き出来事を前にして、「神が共におられる」ことに 気づきもしないのです。口先では神を求めているようですが、本当は主を求めようともしていません (「祭司たちも尋ねなかった。『主はどこにおられるのか』と……」エレミヤ書 2:8)。

そのような状況に対するイエスの言葉は皮肉にも聞こえます。今、神の力を必要としている人がこれほど大勢いるのに、「内輪争いをしている余裕があるのか」と(「家が内輪で争えば、その家は成り立たない」マルコによる福音書 3:25)。

誰が良き業をなそうと関係ありません。ましてや、足を引っ張り合うなどということがあってはならないのです。ただ、そこに働かれている神の力を信じ、喜ぶことこそ求められているのです(「最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい」エフェソの信徒への手紙 6:10)。

悪とは、神をないがしろにすることです(「まことに、わが民は二つの悪を行った。生ける水の源であるわたしを捨てて/無用の水溜めを掘った」エレミヤ書 2:13)。悪の力は私たちの耳元で、「直接的でインスタントさえ叶えばそれで良いではないか」とささやきます。

神の民は、神ならぬものを神としようとする誘惑に対して、主を呼び求めることによってのみ打ち

克つことができます(「ほむべき方、主をわたしは呼び求め /敵から救われる」詩編 18:4)。神の武具を身につけ、雄々 しく、勇ましく闘うというよりむしろ、静かに、神の助けの 中でしっかりと目を覚まし、祈り続けることによって打ち 克つことができるのです(「どのような時にも、"霊"に助け られて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶 えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい」エフェソの信 徒への手紙 6:18)。そこに派手さはなくても良いでしょう。 一人ひとりが地道に、愚直に神を求めて生きていく。ただそ れだけで十分なのです。

